

1 May 2022

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan
Newsletter No. 21

世紀末アングロ・サクソン主義をめぐって
—グレイター・ブリテンとイングランドの田舎—

金子 幸男

トマス・ハーディ (1840-1928) による小説『ダーバヴィル家のテス』(1891) では、フランス貴族の響きをもつダーバヴィル (d'Urberville) という姓が深い意味をもつ。小説中 1066 年、ノルマンの征服王ウィリアムと共にやってきたサー・ペイガン・ダーバヴィルという有名な騎士への言及があり、この家系はフランス人、ノルマン征服、ヘイスティンズズの戦い、ノルマンの城、ノルマンの軛、そしてノルマン人が古きアングロ・サクソンの権力と財産の篡奪者であることを思い出させる。この図式を利用してハーディは、北部出身の新興成金サイモン・ストーク (陶器産業の町、ストーク・オン・トレントを連想させる) が南部イングランドにカントリーハウスを購入して定住する際、箔をつけるためダーバヴィルに改姓させ、またその息子アレックには偽ダーバヴィル、偽ノルマンとして村娘のテスを誘惑、乱暴し、情婦にする役割をあてがう。ヒロイン、テス・ダービーフィールドは実は真正のダーバヴィル家の出でありサー・ペイガンの子孫、ノルマンの子孫なのであるが、ダービーフィールドという現在のくずれた姓が示唆するように落ちぶれたのであり、ノルマン人がアングロ・サクソンに同化したという歴史を間接的に反映していると言えようか。またハーディが小説の舞台にウェセックスという古い王国名を与えたことは、ノルマン征服以前のアングロ・サクソン時代に懐旧の情を抱いていたのではないかと思わせる。したがって村娘のテスが間接的に古い無垢の王国と慣習を象徴し、近代を象徴する偽ノルマンのアレックにより不幸になるということは、アングロ・サクソンの古き村、習俗、農法、民衆文化等が近代になり失われてゆくことに対するハーディの哀惜の念を表明したものと取れるであろう。さらにテスが乱暴されるのはドルイド時代に崇拜された宿り木がやどる櫨の木が生えた太古の森林であり、アレック殺害犯として逮捕されるのは当時、ドルイド僧の寺院という説もあったストーンヘンジであるから反ケルト的な含みもある。このような錯綜としたアングロ・サクソン主義の背後には、どのような力が働いていたのだろうか。

それは世紀末イングリッシュネスの台頭と関係する。クリشان・クマールによれば、1870 年代以前のパックス・ブリタニカを謳歌していた時代は、イングリッシュネスは控えめで、ブリティッシュネスの陰に隠れていた。このブリティッシュネスはイギリス帝国を支えていくために、4 つの複合的なネイション (イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド) が協力しあう中で自らを維持・強化していた。特に、優秀な人材 (軍事、政治、行政、伝道) を各ネイションは提供していた。ブリテンは進歩の考えに裏打ちされた道徳的意識 (キリスト教布教と文明化の使命) を

持ち、国民生活の中にも帝国意識は帝国からの物品という形で浸透していた。また君主制がイギリス帝国を統合し、ブリティッシュネスの意識を維持した役割も見逃せない。

ところが、1870年代になりイギリス帝国は自信を喪失し始める。アイルランドなどで勢力を増したケルト・ナショナリズムがケルト文化再発見を促しブリティッシュネスの土台を揺るがし始めると、イングランドの反ケルトの姿勢が強まる。またゴードン將軍の死や南アフリカ戦争は、文明化と伝道というブリテンの使命に疑問を抱かせ、帝国主義批判が内部から起こる。さらにデカダンス、退化はヨーロッパ文化の危機ととらえられる。そのような中、イングランドのアイデンティティとは何か切実な問題となり、ホイッグ史観（サクソンの自由の進歩の歴史）を基礎とするアングロ・サクソン主義が登場、田舎と民衆への反産業的な愛着心を喚起し、特に古代アングロ・サクソン王国が存在したサウス・カントリー（ハーディのウェセックス）への愛着となって現れる。よってテスの物語の原動力にはこのようなイングリッシュネスが働いていたと言えよう。

しかし、70年代以前にアングロ・サクソン中心主義がなかったかと言えばそうではない。ポスト・コロニアル批評の碩学ロバート・ヤングは、歴史上、ブリテンの民族的起源の役割を果たした2つの神話があると言う。アーサー王神話とアルフレッド大王神話である。前者において、アーサー王はブリテンの住民であるケルト民族の指導者だったが、最終的には、ブリトン人をアングル人、サクソン人と統合し、一つのブリテン国家にまとめあげる。後にはノルマン人も統合され、このアーサー王神話は、プランタジネット、チューダー、スチュアート王家が初期ブリテン王たちの正統な後継であることを示す神話として利用される。ところが17世紀、アーサー王神話は旧教と新教の対立を解決できず衰退し、1688年の名誉革命で政治的には排除される。ドイツのハノーバー出身のジョージ1世の誕生とともに、ホイッグ的歴史観とアルフレッド大王神話が登場し、19世紀、アルフレッドは英語圏の国民的守護聖人となり、活字、演劇、山車、彫像などで表象される。19世紀半ばには近代サクソン人は「アングロ・サクソン」と呼ばれるようになる。この新しい神話において、イングランド人はサクソン人、チュートン人、ゴート人またはゲルマン人となった。旧神話ではイングランド人はケルト、バイキング、アングル、サクソン、ジュート、ノルマンなどの混交、特にサクソンとケルトの混合とみなされていたので大きな変化である。

新しい神話に関わる個人名を少しあげると、ラグビー校の校長で歴史学者のトマス・アーノルドは、イングリッシュネスは文化的にはローマ、ギリシア、ヘブライの混合体であるが、イングランド人は純粋なチュートン人＝サクソン人であると主張。アーノルドの同時代人のトマス・カーライルもイングランド人は民族的にも、また歴史・言語・法律など文化的にもサクソン人と言い、ケルト人には敵意をもつ。歴史学者のT・B・マコーレーはチュートンの英雄オレンジ公ウィリアムとカトリックの悪役ジェイムズ2世を登場させ、イングランドとアイルランドの関係をサクソン人とケルト人の間の敵意という図式で描く。対照的にマシュー・アーノルドは、サクソン一辺倒ではなく、ケルト文学の理解が、イングランド人が政治的つながりをもつケルト人／アイルランド人を理解するのに不可欠とした。彼はイングランド文化をサクソンとケルト、ヘレニズム文化とヘブライ文化の弁証法であるとし、古い歴史的な神話（イングランドはケルトとサクソンの混交）を展開した。

アングロ・サクソン主義は、ブリテンの中だけで終わる話ではない。トマス・アーノルドは、アングロ・サクソンが渡り鳥のように移動し、アフリカ、インド、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラレイシアと地球上を取り巻いているという。若い頃から海外植民地を旅し、グレイター・ブリテンという考え方を提示したリベラルな政治家、C・W・ディルクの『グレイター・ブリテン』という旅行記は、「英語を話す国々を旅して」という副題が示しているように、アメリカ、カナダ、メキシコ、ポリネシア、太平洋諸島、オーストラリア、ニュージーランド、インド、セイロンなどを民族／人種、地理、文化という観点から分析したもので、言語、法律、宗教、制度、慣習を共有するアングロ・サクソン同胞のネットワークについて考察したものである。ケルトとサクソンの対立はイングリッシュネスの傘のもとであり目立たなくなるが、あくまでも彼はイングランド中心主義を取り、自由の観念を強調、「私が気候、土壌、生活様式、多民族との結合が血筋を少しは変えると言ったとしても、私はまた本質的にはアングロ・サクソン民族は常に単一であると理解していた」(Preface vii)と言う。「グレイター・ブリテン」には、他にイギリス帝国、入植者植民地（＝ドミニオン）をさす場合（この用法が一般的）もあることを付け加えておこう（ダンカン・ベル）。

ここでグレイター・ブリテンという英語を話す国々の人々が、イングリッシュネスを再現しようとしている姿を描いたある小説に目をとめてみよう。オーストラリアへ向かった白人入植者たちの建国神話を史実に配慮しながら描いた、ケイト・グレンヴィル (1950-) の傑作『闇の河』(*The Secret River* 2005) である。18 世紀末、ウィリアム・ソーンヒルはロンドンの貧しい地域に住み、テムズ河の船頭をして家族を養っていたが、生活苦から盗みを働いたため、オーストラリアに流刑。一家は大自然の中で原始的な生活を送り、先住民と対峙することになる。そのような中、妻サルはイングランド、故国 (ホーム) へのあこがれを強く持ち続ける。文化の相違と言語の壁による相互不理解から緊張関係にあった先住民と開拓者の間で槍、銃、毒物を使った殺し合いが起こる。たとえばウィリアムの畑のトウモロコシが盗まれ畑が焼き尽くされると、報復としてソーンヒルら開拓民の男たちは先住民を銃で虐殺する。先住民を排除し生命の安全と生活の安定が保障されると、サルは子供たちを入植地で育てていくことを決心し、母国への帰国はあきらめる。

この作品のイングリッシュネスを列挙してみよう。水上輸送を生業とするウィリアムの船が行き来するホークスベリー河はテムズ河に譬えられ、サルとウィリアムの小屋は「庭」と呼ばれる。サルは病で瀕死状態のとき、北にある故郷 (ホーム) に頭を向けて葬ってほしいと願う。名前さえ知り得ない先住民にロンドンの知り合いの名前をつけ、先住民の皿をサルは骨董品として収集。働かないで楽しむだけの先住民はジェントリーのようなのだ。またアイルランド人の知り合いが、成功したソーンヒル夫妻のために建てた邸宅 (ヴィラ) は、サルの母が本国で働いていた屋敷の名をとりコバム・ホールと呼ばれる。英国に帰れば植民地で生まれ育った子供たちは、日焼けした肌と植民地の習慣を身につけたよそ者でしかないから、サルは子供たちを故郷 (ホーム) へ連れ帰ることを諦め、この地に故郷 (ホーム) と呼べる場所を築く決意をする。植民地の邸宅をイングリッシュな家にしようというのだ (410-18)。居間には、肘掛け椅子と揃いのソファを置き、料理や掃除、洗濯をする女中たちを雇う。高い石塀をめぐるサルの庭園は英国風の簡素な庭をめざす。水仙やバラを咲かせ、砕いた砂岩を敷いた小道は複数の正方形花壇を連結する。庭と邸宅の間には芝生を植え、河から家までの道の両側に落葉樹を植えて道を覆う緑のトンネル (英のコバム・ホールの車道に相当) を造ろうとする。しかし現実には厳しい。赤いゼラニウムは育ったが、ポプラやバラ、水仙、芝生は土壌や気候が合わないせいか根づかない。残ったのは3本のポプラの若木のみであった。サルのイングリッシュネスを再現しようという試みは失敗に終わる。ディルクは、イングリッシュネスは本国を離れて入植地にまで広がっているというが、グレンヴィルはそのような考えが甘いことを示唆している。

グレンヴィルが繰り返す「ホーム」という概念は庭とともにイングリッシュネスを考える上で重要だ。イギリス本国に目を向けると世紀末のアングロ・サクソン主義は、田舎をホームと慕う人々の眼差しとしても現れ、それはハーディが受容されたこととも関係する。都会のスラムや退化の問題が田舎嗜好の要因であることは確かだが、ヤングによれば、タキトゥスの時代からアングロ・サクソンは田舎を好む民族であったという。

ここでイングランドの田舎への郷愁に満ちた作家フローラ・トンプソン (1876-1947) を取りあげたい。彼女は 1880 年代に生まれ育った故郷オクスフォード州の村や町の生活を自伝的作品『ラークライズからキャンドルフォードまで 三部作』(1939-43) の中に描いた。主人公ローラが育った村ラークライズ、近隣の町キャンドルフォードの親戚とローラ一家との交流、キャンドルフォード・グリーン村郵便局員として局長のミス・レーンのもとでローラが働く様子が生き生きと語られる。当時の村の日常生活が珠玉のエピソードを通じて手にとるように伝わってき、どのエピソード一つをとっても輝いている。

フローラ・トンプソンの描く 5 月のコテージ・ガーデンは、キャンドルフォード・グリーン村の郵便局兼自宅兼鍛冶屋に隣接しており、花壇と菜園とミツバチの巣箱からなる典型的なものである。ローラが見ているリンゴの花、水仙、サクラソウ、忘れな草、それにバラやラベンダーは手当たり次第に自然に任せて咲いている。ここでは庭の話は別の機会に譲るとして、郵便局を訪れるアイルランド人に目を向けたい。トンプソンが描くのはアングロ・サクソン主義の対極にある親ケルト的な態度である (原著 470-72)。収穫時、村にやってくるアイルランド人出稼ぎ労働者は賃金の一部を為替にして、アイルランドの家族に仕送りする。郵便局の窓口業務時間内に来られない彼らのため

にミス・レーンとローラは特別、時間外でも内緒で為替を作ることにしていた。ローラは小さな頃からアイルランド人出稼ぎを見慣れており、恐怖は感じなかった。話し好きな働き者、稼ぐことだけで頭がいっぱいの渡り鳥、彼らの名前をすぐに憶えてしまう。ローラのやさしさは口伝てに広がり、郵便局を訪れるアイルランド人は増え、日曜午前も働くことになる。文盲なのでローラは代筆もする。彼らの手紙の言葉はよどみなく、豊かな暖かい愛情表現がまるで詩のようにあふれているという。アイルランド人はイングランド人より礼儀正しかった。ここにはアイルランドに対する否定的な感情は微塵もなく、社会の上層部における反ケルト的感情との乖離には驚いてしまう。ここでは田舎嗜好のアングロ・サクソン主義にケルト人が自然な形で統合されていると言えよう。

『テス』の世界を支えているのは世紀末のアングロ・サクソン主義(=イングリッシュネス)であり、それはグレイター・ブリテンをも支えるイデオロギーであったが、『闇の河』の英国式庭園の失敗例からわかるように入植者植民地では不安定なところもあった。また、反ケルト的態度の強度は厳格なサクソン論者であるかどうかによっても違い、トンプソンの描写からは社会の末端において親ケルトも存在したのではないかと感じさせられた。いずれにせよ、アングロ・サクソン主義には硬軟がありそうである。21世紀初頭、『忘れられた巨人』(*The Buried Giant*)という題名の小説がカズオ・イシグロによって書かれ、アーサー王没後間もない時代のアングロ・サクソン対ケルトの問題が取り上げられた。1世紀以上が経ってもアングロ・サクソン主義に対する人々の興味は尽きないようだ。

【参考文献】

- Bell, Duncan. *The Idea of Greater Britain: Empire and the Future of World Order, 1860-1900*. Princeton UP, 2007.
- Dilke, Charles Wentworth. *Greater Britain: A Record of Travel in English-Speaking Countries During 1866 and 1867*. 2 vols. 1868. Cambridge UP, 2009.
- Kumar, Krishan. *The Making of English National Identity*. Cambridge UP, 2003.
- Thompson, Flora. *Lark Rise to Candleford*. 1839-43. Penguin, 2008. 邦訳『キャンドルフォード』(朔北社、2008)、『キャンドルフォード 続・ラークライズ』(朔北社、2021)
- Young, Robert J.C. *The Idea of English Ethnicity*. Blackwell, 2008.
- ケイト・グレンヴィル著、一谷智子訳『闇の河』(現代企画室、2015)
- トマス・ハーディ著、高桑美子訳『トマス・ハーディ全集 12巻 ダーバヴィル家のテス』(大阪教育図書、2011)



ヴィクトリア朝のカントリーハウス Harlaxton Manor の魅力 —その壮麗さと歴史的変遷—

西村 美保



‘English man’s home is his castle’ とはよく言ったもので、イギリスを舞台とした映画やTVドラマを観ていると、家に対するこだわりや愛着の強さ、家と呼べるもののバリエーションの多さに驚かされる。ごく一般的なセミ・ディタッチドハウスはもちろんのこと、かやぶき屋根のコテージから広大な敷地を持つカントリーハウスまで、家のサイズ、建築様式、建てられた時代など様々だ。また、ボートやキャラバンカーなど移動する家に住む人もいる。そのようなすべての家のタイプを実際に行って見ることは難しいが、映像の世界を通してでも、内部までディテールを楽しむことができる。ひょっとして、これはアディクションのように、いくつかのドラマシリーズを繰り返し観ている理由の一つかもしれないとさえ思う。しかし今回は私自身が実際に訪れたカントリーハウス

Harlaxton Manor を振り返ってみたい。ヴィクトリア朝に完成された大邸宅で、記憶の中でさえ今なお最も強烈な印象を放っているからだ。

何回かの訪英で、建設された時代の異なるいくつかのカントリーハウスを見て回ったが、当初はカントリーハウスを訪れることが目的だったわけではない。使用人関連の物を吟味するため訪れたミュージアムが元カントリーハウスである場合や、所蔵品が今ではホテルとなっている近隣のカントリーハウスのものだと分かり、次の機会にそのホテルに泊まったこともある。そのうち、生活の場として興味を持つようになった。

Harlaxton を訪れたのは 2013 年の夏のことである。アイザック・ニュートンやマーガレット・サッチャーが生まれ育った町 Grantham にあり、駅から 3 マイルのところろに幻想のように浮かぶ建物だ。1838 年 1 月 4 日に訪れた Charles Greville(1794-1865)は「一つの棟を除いて骨組みが完成されていた」この建物について、「建築と装飾の両方に関して、これ以上に完璧なものはない」と述べている。ある程度完成形が想像できるほどの外観だったのか、あるいは設計図やイメージの絵を見せてもらったのだろうか。「年収 12000 ポンドほどの紳士」グレゴリー氏(Gregory Gregory, 1786-1854)が建設を思いついたのはかなり前のことで、それから貯金を始め、ヨーロッパの様々な建物を見て回り、気に入ったあらゆる意匠を反映させようとした。

彼はヨーロッパのあらゆる地域へ旅して、自分の家に反映させるべく、有益なものや装飾的なものなど、珍しいものを集めた。そして自分のデザインを完成させるに十分なお金が貯まってから建築を開始した。その壮麗さは大変なもので、それだけ建築のスピードは遅いので、生きているうちに完成を見れるかどうかといったところだ。そして独身で子供もおらず、財産を相続する相手のことは嫌いなものだから、満足感を求めるのは目的に対してではなく手段に対してだ。狩猟や射撃や宴会を楽しむのを目的とする人がいるように、それは娯楽なのだと彼は言う。そしてその探求が世界のあらゆる場所へと彼を導き、教訓と興味深い研究の可能性をはらむ多様なテイストを生んだ上に、様々な国民や個性的な人物とつきあうことになったのだから、自分の家に住むことはなく、どうしてもよい人々のために苦勞したり、貯金したりしているのかもしれないが、だからと言ってばかっているとは言えないのだⁱ。

グレゴリー氏のあくなき夢の探求について Greville が示したこのような解釈に私は好感を覚える。この建築物を見た人なら誰もそう思うのではないだろうか。それほどの説得力が建築物自体にある。グレゴリー氏は謎に包まれているが、Harlaxton の公式サイトⁱⁱ は経歴についてのおおよその概要を提供してくれている。炭鉱を含むノッティンガム州の地所を持つ家柄の出で、Gregory Williams として生まれ、遺産を受け継ぐたびに名前を変えていった。運河会社や鉄道会社の株も保有していた。1797 年に 11 歳で、ラグビー校に入学し、1805 年、19 歳の時には、オックスフォードのクライストチャーチカレッジに通い、古典、ギリシャ哲学、数学などを学んでいる。しかしながら、当時の多くの紳士がそうだったように学位は取らずに 2 年後に大学を後にした。その後、地方の市民軍で中尉や中尉を務め、1825 年には彼の祖先の多くと同様、ノッティンガム州の知事となった。海外の英国大使館で働いていた時期もあり、その間に宮殿のような大邸宅を建てることを視野に入れて、芸術作品を沢山購入したり、地所の一部を売ったりした。

Harlaxton はエリザベス朝イングランドの最も壮麗なカントリーハウスの多くからインスピレーションを受けた建物だ。複数の建築家が携わったが、邸宅の建設全般を通して熱心に関わったグレゴリー氏の支配的ヴィジョンに服従せざるを得なかった。彼は新エリザベス朝スタイルのエッセンスを邸宅に生み出すべく、国内外の大邸宅を訪れて、彼なりのヴィジョンを作り上げた。1851 年に引っ越しをして、1854 年に亡くなったということなので、3 年程は住むことができたが、翌年 1855 年に完成したのだから、こだわりの強さの程が窺える。そして彼の死後しばらくは親族が所有していたが、その後持ち主が次々と交代する。1948 年から 65 年にかけてはイエズス会、65 年からはアメリカの大学—68 年にかけてはスタンフォード大学（‘Stanford of Britain’ として）、1971 年から現在までインディアナ州にあるエヴァンズヴィル大学（‘Harlaxton College’）—の所有である。

Mark Girouard はグレゴリー氏のエリザベス様式の建築への関心は彼自身がその様式の家を持っていたらではないかと推測する。Harlaxton にあったその古い家は長年放置されていて、朽ちかけ

ていた。しかし、それを改築するのではなく、彼自身は新エリザベス様式の大邸宅を建て、新しい庭園の一角に‘picturesquely decaying feature’として残したのであるⁱⁱⁱ。もっとも、建設の途中で、グレゴリー氏はバロックの魅力に取りつかれ、建築家も変えた。従って、そのままだと十分に見ごたえのある壮麗な邸宅だっただろうが、「エリザベス朝とジャコビアンはバロックと融合し得る」という新しい発想によって同時代の建物にはないユニークさが加わった。その結果、衝撃的なまでに力強く、豊満な印象が生み出された^{iv}。

シンプルで合理的な機能美が賛美される現代の傾向とは対照的に、Harlaxton の内部はその装飾性と威圧感で見る者を圧倒し、想像力を掻き立てる。玄関から見える階段を上がってすぐにたどり着く、‘Great Hall’は現在、集会の場所として利用されているらしいが、壁面に据え付けられた頭を抱えて苦悶の表情を浮かべる彫像に目が釘付けになる。一体なぜこの彫像が選ばれたのか。この世が悩みに満ちたものであるということを象徴させたいのか。さらに、このホールを出たところにある階段 ‘Cedar Staircase’ の天井部分はまるで天国の情景のようで、圧巻である。この情景をイ



図 1. The Great Hall 壁面に設置された彫像



図 2. The Great Hall



図 3. The Cedar Staircase の天井部分



図 4. The Conservatory



図 5. 裏庭



図 6. The Morning Room

* 写真はすべて筆者による撮影

メージした時、あるいは完成後に見た時、グレゴリー氏の頭にはどんな音楽が鳴り響いていたのだろうか。豪華絢爛な部屋や独特な装飾が目をつくる部屋など次から次へと驚嘆させられた後で、私自身ようやく癒された気分になったのは、コンサヴァトリーに出た時だった。外の光がガラス張りの天井を通してこぼれ落ち、たくさんの観葉植物が快適な空間の中で大きく成長している。外に出ると、さらにリフレッシュできるが、そこは建物の裏手で、さびれた凝った裏庭がある。石の階段の両脇に大きなライオンの彫像が置かれ、その階段の奥から水が湧き出て下へと流れた時代もあったらしい。外から見ただけでも、使用人たちのエリア ‘Servants’ Wing’ は何の装飾もなく、質素な作りであることが見て取れるが、再び中へと入ると、内部もそうだと分かる。主人と客が通るエリアがそれほど装飾的だったのに、‘Servants’ Wing’ の廊下は配管がいくつもむき出しの状態だ。キャンパスとしてはどちらの空間も利用されていて、例えば、‘Morning Room’ と呼ばれる豪華だが、こじ

んまりとした部屋が教室として利用され、アメリカのキャンパスと双方オンラインで授業をするのだという。一方でかつての台所が図書館に変貌し、レンジがあった場所に書棚が作られている。ハウスキーパーや執事の部屋はそれぞれ事務所や音楽室として、使用人たちが住んだ屋根裏は学生寮として活用されている。こうした古い建築物の再利用の仕方も、とても興味深い。

最後になるが、今回執筆の機会を与えられたことで、グレゴリー氏の壮大な夢の体現とその後の姿、そしてそれを五感で味わったあの日の感動を書くことができ、良かった。書いている間は心の目は Grantham を、しかも現代と 19 世紀を交互に旅していた。実際の旅も好きだが、心の旅も何と贅沢な時間だろうと思う。

i Charles Greville, *A Journal of the Reign of Queen Victoria* (London, pp. 42-3, 1885), Mark Girouard, *The Victorian Country House*. p.90. (New Haven and London: Yale University Press, 1979) 和訳は筆者によるもの。

ii “Harlaxton Manor Archives”

<https://harlaxtonmanorarchives.wordpress.com/timeline/gregory-gregory/>

iii Girouard, op.cit., p. 94.

iv Ibid., p. 96

v 掲載に関しては Harlaxton College, University of Evansville の許可を得た。感謝の意をここに示したい。



日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2021 年度総会

日時：2021 年 11 月 20 日（土）16 時 40 分～17 時 00 分

場所：同志社大学新町キャンパス、Zoom（司会 玉井史絵事務局長）

議題

【報告事項】

1. 2021 年度活動報告・活動予定

I. 運営委員会、役員会関係

2021 年 1 月 第 1 回 編集委員会（メール審議）

2021 年 8 月 第 2 回 編集委員会（メール審議）

2021 年 8 月 4 日 第 1 回 大会企画・準備委員会（Zoom）

2021 年 8 月 24 日 第 1 回 運営委員会（Zoom）

2021 年 11 月 19 日 理事会（Zoom）

2022 年 2 月 7 日 第 2 回 大会企画・準備委員会（Zoom）

2022 年 3 月 25 日 第 2 回 運営委員会（Zoom）

II. 学会誌、ニューズレター

2021 年 5 月 *The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 20 発行

2021 年 11 月 『ヴィクトリア朝文化研究』（*Studies in Victorian Culture*）第 19 号発行

III. 全国大会関係

2021 年 11 月 20 日 第 21 回 全国大会開催 同志社大学新町キャンパス
（対面と Zoom のハイブリッド形式での開催）

IV. その他

学生会員大会研究発表補助金規定の策定

日本ヴィクトリア朝文化研究学会非会員謝礼規定改定

◎会員動向 対象期間：2020年4月から2021年3月まで

新規入会者 11名 退会者 11名

2021年3月22日現在 会員 321名（うち学生 25名）

2. 学会誌について

上記の通り、発行された。

3. 大会・企画委員会の活動について

高橋美帆大会・企画委員長より、大会・企画委員の各氏が2022年度大会の準備を進めると共に、学会を活性化するための企画を計画中であることが、報告された。

4. 学会企画事典の進捗状況について

大石和欣事典編集委員会副委員長より、事典の計画の進捗状況について報告された。

5. その他

特になし。

【審議事項】

1. 2020年度決算

資料に基づき報告され、了承された。

2. 2021年度予算案

資料に基づき報告され、了承された。

3. 2022年度の大会について

第22回大会は、2022年11月19日（土）に早稲田大学戸山キャンパスにて開かれる予定であることが報告され、了承された。

4. その他

『ヴィクトリア朝文化研究』のJ-Stage登録について、橋本順光副会長より説明があり、意見交換が行われた。



2020年度決算報告書（2020.4.1-2021.3.31）

【収入の部】

単位：円

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	5,112,964	
利子	13	ゆうちょ銀行（総合口座）より
出展料	0	
学会費	1,808,000	
学会誌販売	2,000	
合 計	6,922,977	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
-----	-----	-----



通信費	64,018	郵便、手数料等
大会経費	50,000	大会講演講師謝礼
懇親会費	0	
サーバーレンタル代	9,721	更新料含む
学会誌作成・郵送費	745,310	
学会誌用図書費	37,582	書評用図書
振込手数料	52,012	振込、振替時に生じる手数料
消耗品費	7,135	コピー用紙、インク等
役員会費	0	会場費
役員交通費	0	
非会員謝礼・交通費	30,000	学会誌書評執筆者 3 名
事務局員謝礼	252,000	月 10,000 円×2 名 月 6,000 円×1 名
合 計	1,247,778	
次年度繰越金	5,667,191	

以上の通りご報告いたします。

2021 年 6 月 30 日 会計 玉井史絵

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2021 年 8 月 1 日 会計監査 並河葉子

2021 年度予算案 (2021.4.1-2022.3.31)

【収入の部】

単位：円

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	5,650,056	
利子	13	
学会費	1,762,000	
出展料	0	
学会誌販売	2,000	2020 年度は 2,000 円
合 計	7,414,069	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
通信費	62,000	2020 年度 64,018 円
大会経費	300,000	2020 年度 50,000 円
懇親会費	40,000	
サーバーレンタル代	10,000	2020 年度 9,721 円
学会誌作成・郵送費	750,000	2020 年度 745,310 円
学会誌用図書費	70,000	2020 年度 37,582 円
振込手数料	10,000	振込、振替時に生じる手数料 (2020 年度 52,012 円 2021 年度より青色振込票により会費振込の手数料は会員負担となるため減額)
消耗品費	7,200	文具料として 2020 年度 7,135 円
役員会費	0	理事会、運営委員会、編集委員会 (2020 年度 0 円)
役員交通費	300,000	運営委員会、編集委員会 (2019 年度 313,720 円)
非会員謝礼、交通費等	30,000	2020 年度 30,000 円 (学会誌謝礼)

事務員謝礼	312,000	月 10,000 円×2 名、月 6000 円×1 名
合 計	1,891,200	

次年度繰越金	5,522,869	
--------	-----------	--

合 計	7,414,069	
-----	-----------	--

第 22 回大会のお知らせと研究発表の募集

第 22 回大会は、2022 年 11 月 19 日（土）に早稲田大学戸山キャンパスで開かれる予定です。第 1 シンポジウムの題目は「19 世紀出版文化とユニテリアン・ネットワーク：Harriet Martineau を中心として」で、モデレーターは関田朋子氏（日本大学大学教授）、パネリストは、梅垣千尋氏（青山学院大学教授）、大竹麻衣子氏（桜美林大学准教授）、松本三枝子氏（愛知県立大学名誉教授）の予定です。第 2 シンポジウムの題目は「〈親子分離〉からみるヴィクトリア朝イギリスの家族」で、モデレーターは森本真美氏（神戸女子大学教授）、パネリストは並河葉子氏（神戸市立外国語大学教授）、奥田伸子氏（名古屋市立大学教授）の予定です。

特別講演は宮城徳也氏（早稲田大学教授）にお願いすることになっています。どうぞふるってご参加ください。

研究発表（発表時間 30 分、質疑応答 15 分）を希望する会員は、発表要旨（400 字）と略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）および主要業績を記した Word ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。送信後 3 日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いします。**締め切りは 2022 年 7 月 10 日（日）必着です。**

昨年度より、学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励する目的で、運営委員会と理事会の議を経て、「学生会員大会研究発表補助金規定」を制定いたしました。大会研究発表を行う当該年度に本学会の学生会員である者を対象に、10,000 円を支給いたします。（ただし、この補助を受けた会員は大会後最低 2 年間、会員として在籍しなくてはなりません。）詳細は、事務局までお問い合わせください。

なお現在、対面と zoom 配信を併用して開催と計画していますが、今後の新型コロナウイルスの状況によっては、変更が生じる可能性があること、どうぞご了承ください。

第 23 回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2023 年 11 月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 23 回全国大会（開催場所と日時は今年の 8 月に決定される予定です）における、シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ 2 時間 30 分程度（15 分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。**締め切りは 2022 年 10 月末日（月）必着**といたします。**締め切りが一昨年度よりも 2 か月早くなりましたので、ご注意ください。**

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については、運営委員会（2023 年 1 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締め切り：2022 年 10 月末日（月）必着
2. 申請方法：下記の申請書必要記載事項を記入した Word ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。
3. 申請書必要記載事項
 - ① シンポジウム・ラウンドテーブルのタイトル

- ② 趣旨（400 字程度）
- ③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
- ④ プログラム

1) 司会（氏名、所属） 2) 報告者（氏名、所属） 3) 各報告者の題目および報告要旨（200 字程度） 4) タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度〔休憩含む〕に収まるように計画してください）

＊シンポジウム・ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。

4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部 玉井史絵研究室内

Tel: 0774-65-7223

E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com



編集後記

一昨年から続くコロナ禍に加えて、本号の編集作業中から、ロシアによるウクライナ侵攻という悲劇が始まり、人々が不安なく集い、自由に渡航できた日々は、遠いものとなってしまいました。第 21 号はご校務・ご研究で大変お忙しい中、金子幸男先生と西村美保先生が、玉稿をお寄せくださいました。心よりお礼申し上げます。（NL 担当 杉村醇子）



発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部

玉井史絵研究室内

T E L : 0774-65-7223

E-mail : victorianstudies.japan@gmail.com

発行日：2022 年 5 月 1 日

